

魔法の音

魔性の音

R18

BanG Dream! Girls Band Party Fan Book LISA×YUKINA



魔法の指

魔性の声

LOSA×YUKONA



こんにちは、あめいろの七色です  
この本をお手に取って頂きありがとうございます

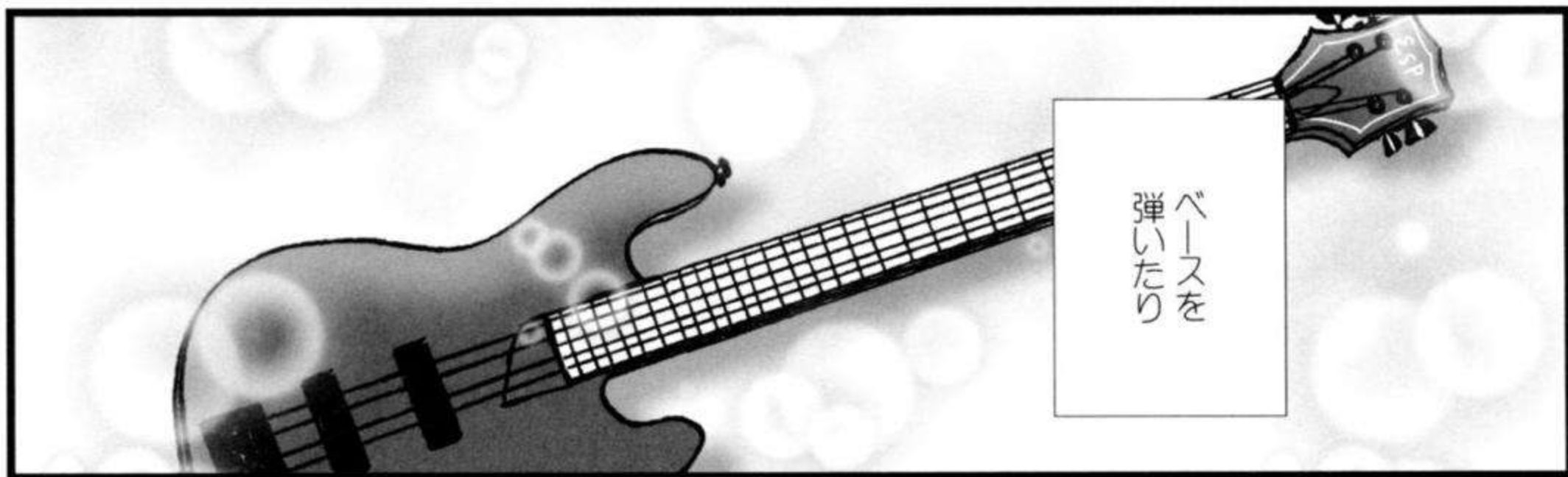
今回リサ姉は指、友希那さんは声に焦点をあてて描いてみました  
リサ姉はベースを弾いたり、お菓子を作ったり、ネイルをしたりと  
指に関することが多いですね  
友希那さんはボーカルでももちろん声が魅力的で  
お互いそこが好きっていうのを思い合ってれば  
いいなあという願望を詰めてみました

それでは本文楽しんで頂けると嬉しいです

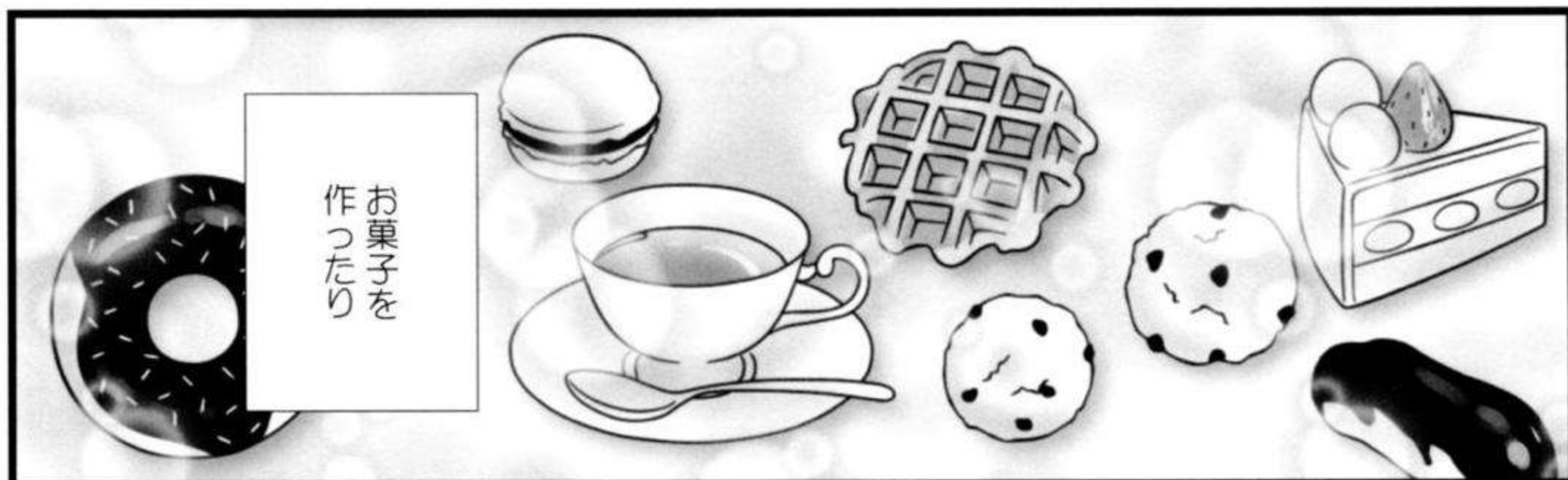
リサの指は まるで魔法のようで

# 魔法の指





ベースを  
弾いたり



お菓子を  
作ったり



まじ——



何かを生み出す  
リサの指が好き





すーっ...

暖かい  
この手が  
好き



壊れものを  
触るよつに

優しく  
わたしに  
触れる



きゅん

きゅん



気恥ずかしいから  
リサには  
言わないけれど

あの...  
友希那  
えっちなこと  
していい?

もし...  
もし...

.....聞かないで



んっ



ねえ友希那...  
顔見せて?  
あと唇噛まないで  
傷ついちやう

嫌、よ...っ

も...っ



んっ

こころいひよきもの  
触り方も  
優しいけね...



少し  
苦手だわ

触られた場所から  
身体の内が  
熱くなって  
変な感じがして



キスしたいから...  
ね?おねがい

嫌では  
ないのだけれど





気持ちよくて  
声が  
止められない

ハハッ  
だめっ  
あ

恥ずかしい  
のに

あ

ちゅ

ちゅ



かじ



深い...っ



ぬぶぶぶぶぶぶ

かじ



友希那の好きなトコ♡

くちゅっ  
くちゅっ



駄目

だめ...っ

そんなになされたら...

だめ...♡

んっ♡



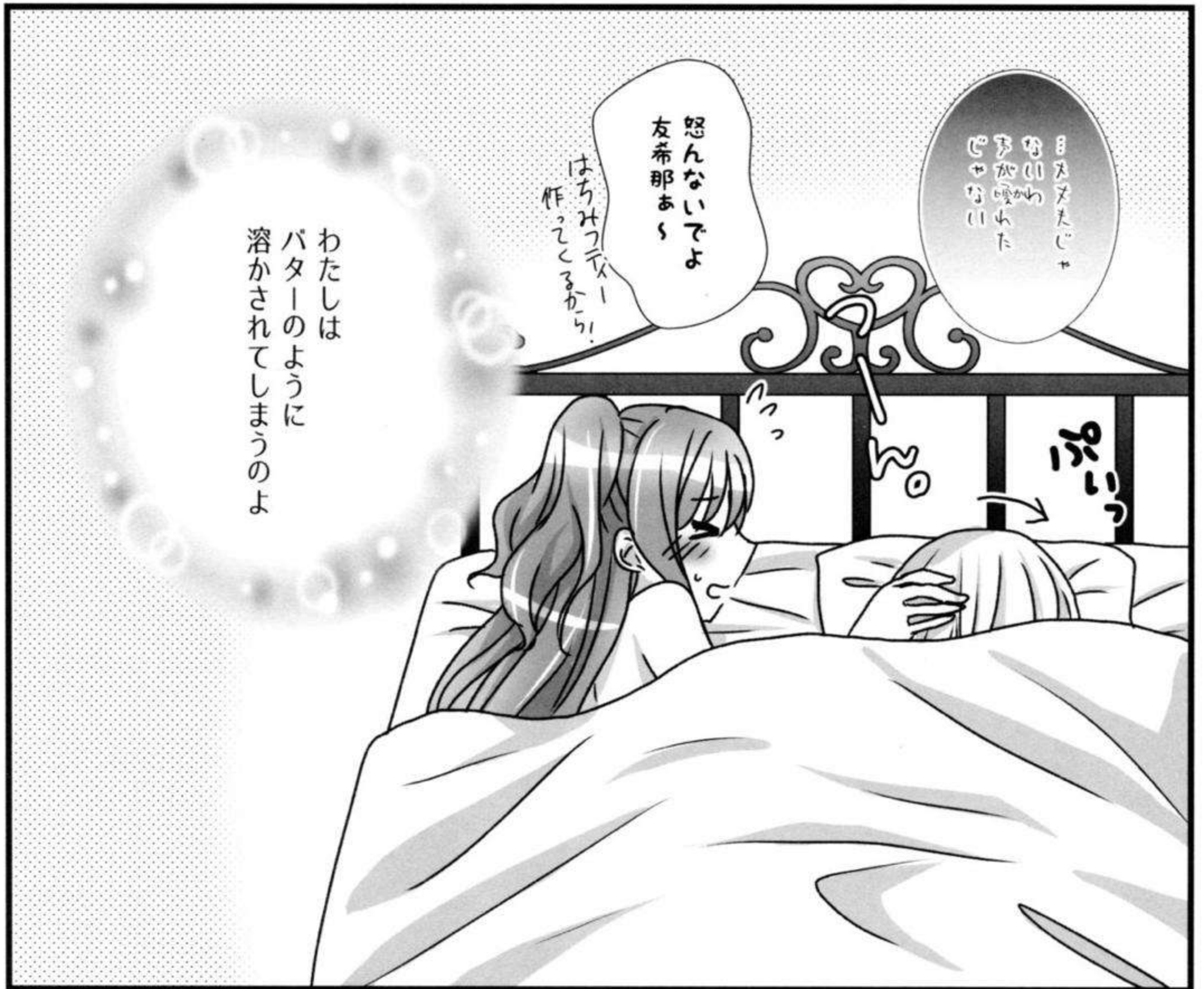


あなたに  
触れられると

Mん...



…大丈夫？  
友希那



目も眩いじゃ  
ないわ  
夢か噂か  
どやない

怒らないでよ  
友希那

はちみつデス！  
作ってるから！

わたしは  
バターのように  
溶かされてしまうのよ

んんん

んんん

んんん



魔法の指  
魔性の声



友希那の声は アタシにとって魔性だ


# 魔性の声





力強く  
響く声


上手いのは  
もちろんだけど  
単純に声も好き



歌っている  
ときの  
友希那の声は

リサ

その声で  
呼ばれるのが  
アタシは何よりも  
好きなんだ



特別な響きを  
感じるのは  
きつと気のせいじゃ  
ないよね？

友希那は  
素直に言ってくれたいけど

スフッ...

全身が  
震えるくらい  
ゾクゾクする





だから  
色んな声も  
聴きたいん  
だけど…



友希那  
また唇噛んでる

グッ!

…あっ  
もう!



はっ



こういうとき  
友希那は声  
我慢しちゃう  
んだよね

はっ

はっ

はっ



嫌がってるの  
可愛いと  
思うなんて

変態かな  
アタシ…





友希那に  
汚ないところ  
なんてないよ



リサ……っ

汚いから  
やめてっ！



もっこも  
もっこも  
聴かせて  
欲しい



あ……っ

だめ、  
リサ……

あ……



あ……



あ……



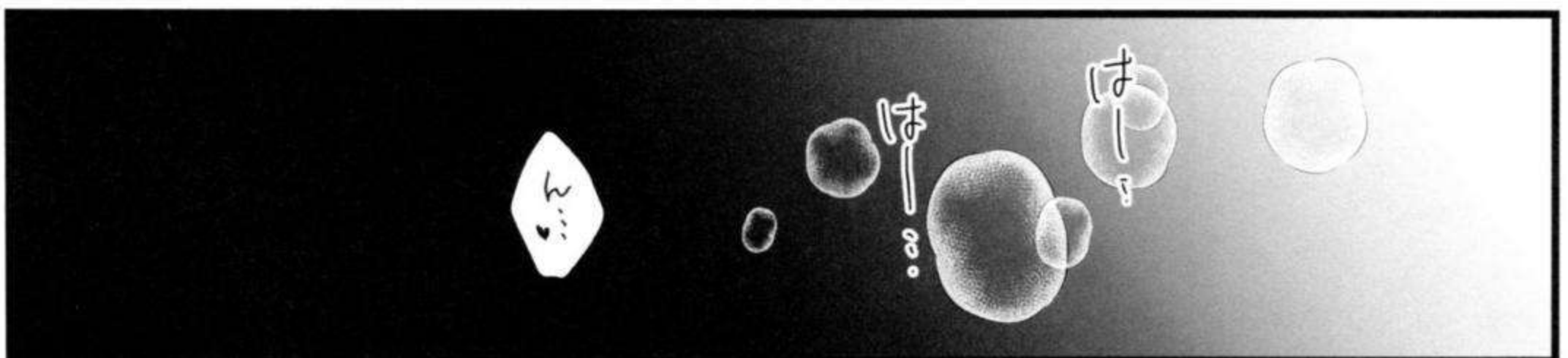
友希那の  
感じてる声……  
高くすす……  
可愛い

アタシ  
聴いてるから  
イけそ……

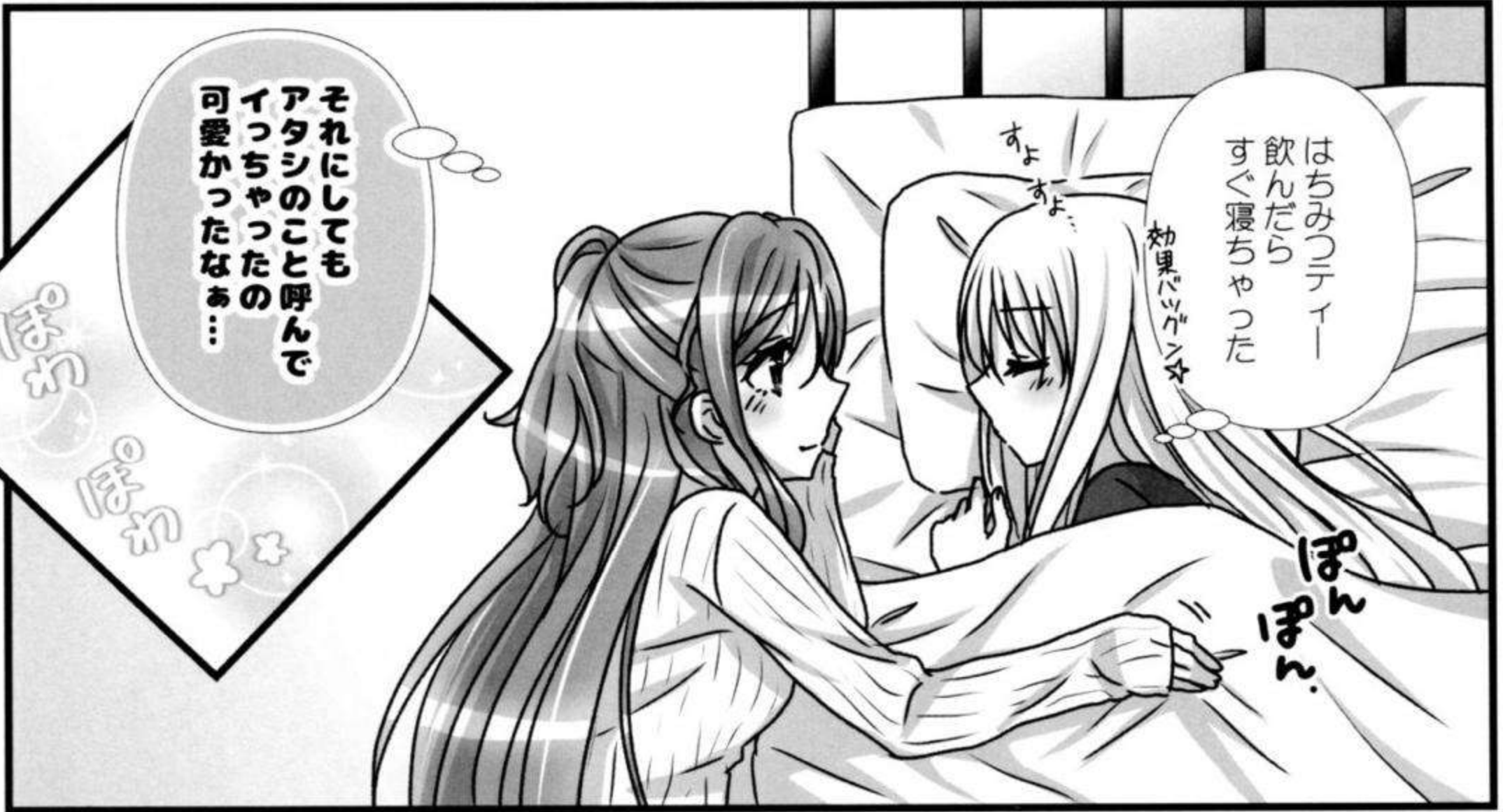
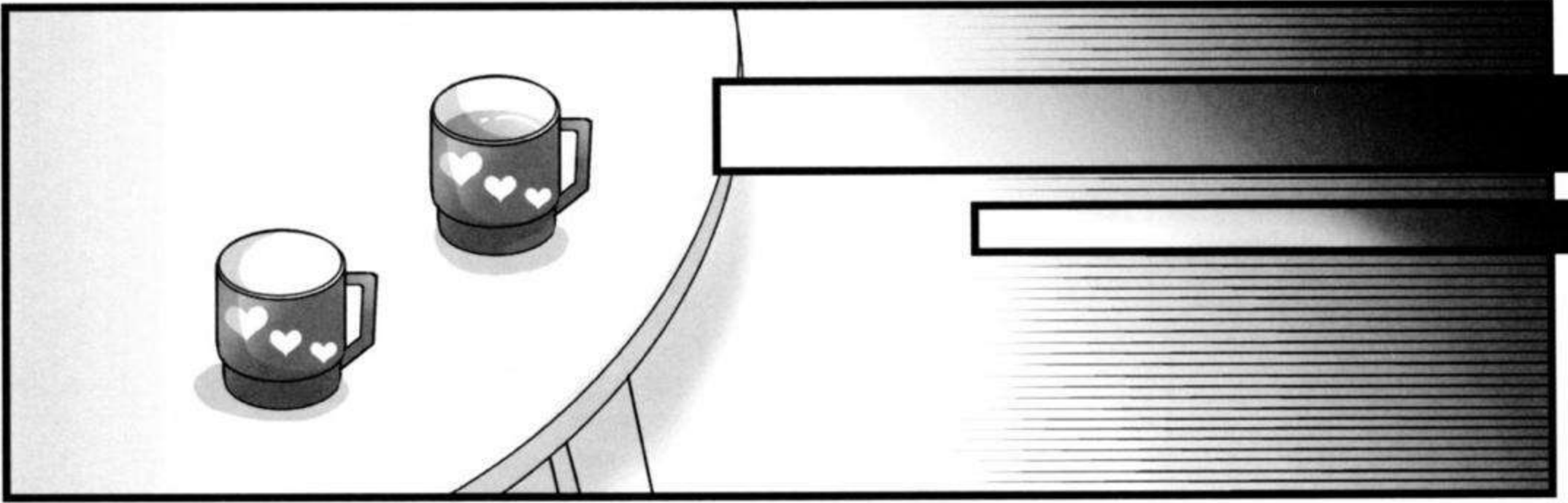
あ……

あ……














友希那に  
名前を呼ばれる度に

アタシは  
魅了されて  
虜になっちゃうんだ



銀色に想いをのせて

キッド

孤高の歌姫。そう呼ばれていた友希那の素性は思いのほか知られていない。例えばこれでもかかってくらい猫もといにやーんちゃん達が好きだったり、学校の勉強がそれはそれは嫌いだったり（でもちゃんと行きはするんだよねー）、苦いものがとにかく苦手だったり。最近は大いぶ周りに知れ渡ってる気がするけれど、それだって箝口令よろしくみんな口外したりはしないので、Roseliaのボーカルは今日も気高き歌姫だ。

「含みのある言い方ね」

「んー？ いやあ、これはみんなも知らないよねーって思ってたさ」

ちゃぶん、と跳ねたお湯は抗議の表れか、ついで振り返りもせず正確にアタシの顔にお湯をヒットさせる。

滴り落ちるそれを片手でぬぐって、その手は再び友希那のお腹へ戻る。

酷くない友希那？なんて言ったところでお互いまったくそう思っていないことは明白で、くすくすとじゃれ合いのようなお風呂タイムが継続中だ。

「今度から一人で入ろうかしら」

「うわ、すーぐそういう意地悪言うんだから」

じゃあもうアタシが髪洗わなくていいの？ってそう言えば、友希那は少し思案げな顔をして「……それは、困るわね」とポツリと言った。

いやもうこれどうしろって言うのかな。友希那が可愛くてつらい。

今に始まった事じゃないけどさ。

たくさん間違っただけでさ。寂しいこともあったけど、思いが通じてからの友希那は随分と素直になった。

……素直になったんだよ？ほら、お風呂一緒に入ってくれてるし。

「……前々から思っていたのだけれど、リサの基準でズレてるわ」

「んー？ まあ……どんな友希那もアタシには可愛いってことかな☆」

「……」

「ええっ、ちよ、なんで無言でつねるの友希那!？」

あ、痛い痛いとお腹の代わりに友希那のお腹をぺたぺたする。

友希那の眉間にシワがよる。

へらっと笑ってみせたけど、もっとしっかりつねられてしまっただけで流石にう

ひやあと声を上げつつ謝った。

「……いたた……うちのやーんちゃん手厳しすぎない？」

「でも好きでしょう？」

好きだよ。好きですとも。惚れた方が負けってほんとだなーって思っよね。

アタシはきつと友希那には負けっぱなしだ。

もちろん、それが嬉しいの言うまでもないけれど。

……そう、どうせ負けっぱなしなのだから、ただ真っ直ぐに伝えればいい。

「好きだよ、友希那」

「っ……」

愛してる、なんて言うのはまだちょっと早いかもしれないけれど、この感情が愛情でないならなんだというんだろう。

友希那が可愛い。友希那が好き。大切に特別で、笑っていて欲しい人。

アタシの言葉に分かりやすく頬を染めた姿が愛らしい。

ぎゅゅと抱きしめて頬ずりすれば、友希那も力を抜いて甘えてくる。

「……楽しかった？」

「ええ……でも少し、疲れたのかしら？」

アタシに体を預けてほうと息を吐いた友希那はそれでも嬉しそうに笑う。

今日は友希那の誕生日だった。

Cafeで場所を借りてお祝いをして、みんなで見繕ったプレゼントを友希那にあげた。ケーキはもちろんアタシのお手製。



この日の為に準備して、腕によりをかけたふわふわのデコレーションケーキに猫型のプレートを添えた。もう友希那ってば食い入るように見てたよね。これは食べるべきなのかしら……って真剣に悩んじゃうあたりが猫好きの友希那らしい。

そんなRoseliaでの楽しい一日を終えて帰ってきたアタシたちだけど、当然帰宅したら帰宅したで今度は自宅でのお祝いがある。

本日二度目のおめでとうをおじさんたちと友希那に贈って、おばさんのケーキと晩御飯に舌鼓をうった。……いやさすがにアタシも二個目のホールケーキはまずいかなー、って思ったんだけどお祝いだしね？その分練習を頑張っただけで痩せるしかないかなーというのは一抹の不安である。

「隣子の衣装入らなくなったらまずいしね」

「……そうね」

脂肪がたまりやすいこの季節、うっかり衣装が入らなくなったら目も当てられないのでスタイル管理も大事なことだ。

なんだかんだクッキーを毎日のように食べてるし（アタシも味見がてら食べちゃうんだよね……）友希那に至っては甘いもの自体が好きだから、ちょっと二人で気をつけよう。

まあそうはいつでも、友希那は充分細いとは思っただけだよ。

「むしろアタシの方がやばいかも……」

「リサは健康的だと思うのだけど……」

そうはいつでも元々が華奢な友希那とアタシとじゃやっぱり色々と違うと思うんだよね。

ずっと一緒にいたのに、アタシとは何もかも違う女の子。

すべすべのお腹を撫でればそれだけでふりりと友希那が震える。おへそ周りから感触を確かめるように脇腹を撫でて、少しだけ爪を立てる。ぴくりと肩を震わせてるくせに、咄嗟に声を我慢してる友希那はとても可愛い。

……そういうつもりじゃなかったんだけどなあ。でもしょうがない。だって友希那が可愛いから、しょうがない。

「ねえ友希那……ひよっとして期待してる？」

「っ……」

わざと耳元で声を落とせば、今度こそ友希那は分かりやすく肩を震わせて息を飲んだ。

そういう可愛い反応してちゃいけないんだよって、アタシは何度友希那に言っただろう。

孤高の歌姫の本当の可愛さは、アタシだけが知っている。

「っ……リサが……」

「ん？ アタシが？」

「……二人きりだなんて、言うから……」

「……あ……」

言われて記憶を辿れば確かに言った。うちの両親今日は戻らないから、泊まらない？って。

アタシももちろん期待がないわけじゃなかったけど、友希那が疲れてるよいうならって思ってたんだよ、本当に。でもさ……そんな風に言われちゃったらもう、止まらないよね？

「友希那、可愛い」

「っ、リサっ……んっ」

「んっ、ふ……ちゅ……」

顎を掴んでこちらを向かせた友希那に肩越しにキスをする。

最初は角度を変えて重ねるだけ。けれど唇を割って舌を差し込めば友希那も待っていたかのようにすぐに自らの舌で迎えてくれた。

「あっ、ん……」

「ふ、あ……ふふ、友希那……すっごく可愛い……」



「リサ……あつ、やつ……」

「やじゃないでしょ？」

存分に舌を絡めて軽く甘噛みをすれば、それだけで友希那は蕩けたような顔になる。

まだキスしかしてないよーって囁きながら耳を食む。赤く色づいて美味しそう。舌を這わせればそれだけで友希那の声が高くなる

自然と背中が反る分突き出される胸の頂を摘めば今度こそ友希那は嫌々と首を振る。

ねえ、ほんとにイヤ？やめてもいいの？

「っ、リサっ……!!」

「うん、大丈夫、友希那はどこも敏感だもんね」

「そんな心配してな……っ！」

「あは、もうヌルヌルだね☆」

抗議の声を無視してするりと手を下腹から滑らせて茂みの奥へとやれば、すぐにお湯とは違う熱い滑りけが指先に絡む。

普段はクールだからか、逆にスイッチの入った友希那は体の反応がとても早い。

上気した頬、つんと上を向いて硬くなった胸の先、秘唇は熱くアタシを迎えようと早々に蜜を滴らせる。

ねえ友希那、選ばせてあげるよ？

「どこに欲しい？」

「っ……」

「ね、どこ友希那？ このまま胸？ お腹？ それとも……」

「あつ、くうっ……」

「ふふ、まあこっちの外でもいいんだけどさあ……」

胸に添えた手はその膨らみをやわやわと揉みしだき、時折きゅっつと指先で

乳首を刺激する。

それだけでも友希那は気持ちよさそうだけど、茂みの奥から手前へと滑らせる指先にも意識は半分以上取られている。

ギリギリのところを往復して、時折敏感な秘心に蜜を塗りつけるようにすればその度に友希那の腰が震えて揺れる。

ねえ友希那、ちゃんと教えてよ。このままでもいいの？それとも……

「はっ、くっ……リサ……っ！」

「……ふふ、意地悪でごめんね友希那。でもそうだね、今日は友希那の誕生日だもん、ちゃんときたいところにあげるね」

イイのにもどかしくてポロポロ泣き始めちゃった友希那にゾクゾクする。

それでも挿れてって言えない友希那は一生懸命ふるふると首を振って……その手でアタシの指先を入りに導いてくれたから、今日はこれで許してあげる。

「っ……あつ、あああつ……!!」

「あはっ☆ 熱いね友希那……挿れただけでイっちゃった？」

「はっ、あ、ああ……っ」

イイ子だね、って囁きと共に二本まとめた指先をずちゅんと奥に突き入れればそれだけで軽く達したらしく、友希那の体がかくかく震えてアタシの指先をきゅっつと締め付けた。

まったく力が入っていない体はほとんどアタシにもたれかかっていった余韻で脱力するのに、指先を包む友希那のナカは逃すまいと締め付けてくる。

友希那が言えないもつとをアタシの指に絡む蜜と熟れた秘肉がさらに奥へと導いていく。

「ふふ……でもさすがにお風呂だし、さっともう一回だけイっちゃおうか友希那？」

「あ、や……ダメよりリサ、ダメ……あ、あつ、いつ、あああー!!」

「あ、や……ダメよりリサ、ダメ……あ、あつ、いつ、あああー!!」



だって体が欲しいって言ってるんだもん、しょうがないよね？ってニヤリと笑って、アタシは友希那の制止を流して欲しがってるそこへもう一本増やして挿れてあげた。

ずちゅつと体を通して響く音に比例して友希那の背が大きく反る。いったばかりだからつらいよね？……だからすぐに飛ばしてあげるね友希那。

「あああつ、り、さつ、りさつ！ やあああ！ ああつ！」

「やじやないでしょー？ そういう時はね、イイって言うんだよー友希那？」

「あうつ、あつ、んんんっ！！ む、りよ、むりっ……！ またっ……あ！」

「だーいじようぶ、アタシの指先だけに集中して友希那？」

「ああああっ!？」

ほらナカで動いてるの分かる？って友希那のイイとこでぐちゅぐちゅと掻き混ぜて、ぐっぐつと押し込むように動かせば、腰を跳ねさせて友希那が気持ちイイって応えてくれる。

もつと乱れて、もつと見せて。

アタシだけが知ってる友希那。アタシだけの為に歌う友希那。

ジンと熱くなる下腹と頭に、もつと聞きたいとずりゅつと引き抜いた指を

また秘肉を掻き分けてずんつと奥へと突き上げる。

跳ねる水音の中に、ぐちゅぐちゅとした卑猥な音を体と指先で感じながら

友希那を奏でる。

トン、とたどり着いたのは友希那の一番奥。

……友希那が一番感じるところ。

「あ……っ……」

「イっっちゃえ、友希那」

「や……あ、……あつ……ああ——っつ!!」

ずちゅんつと放った最後の一突きに、友希那はひとときわ高い声を上げてアタシの腕の中で絶頂した。

◇  
『……では予定通り練習は休みということ』  
「えーと……うん、ごめんさい、つと……」

送った言葉と共に両手を合わせた兎のスタンプ。すぐに返ってきた返信はため息をつく犬のスタンプ一個きり。見なくたって分かる、画面の向こうの紗夜はスタンプのみたいに呆れた顔でため息をついているのだろう。

シートに散らばった友希那の髪を整えながら、アタシもまた苦笑する。

友希那の体がきつくはない様に、なんて最初は思ってたくせに、お風呂のあたりでもう大分おかしかったなあって、振り返れば最初から最後までアタシは友希那にぞっこんだった。ごめんねと友希那の頭を撫でて、アタシもその隣に滑り込む。請われるままに、そしてアタシが求めるままに行為に耽った余韻はそこに残っている。

我ながら独占欲の強いこと、と紅く咲いた痕を撫でて苦笑する。

なるべく着替えて隠れる配慮はするけれど、つけること自体に躊躇はしない。アタシのだよって刻んだマーキングは友希那にとっても不本意ではないと知っているから。

「重いかなあ……うん、でも、アタシはアタシにしかねないから」

大切な人達が教えてくれた、アタシ自身と向き合うこと。

振り返って確認する時はある。それでも後ろはもう向かない。

アタシも信じてくれる大切な人達と、大好きで隣にいと誓った友希那の傍でアタシはこれからも咲き続ける。

「アタシの全部、友希那にあげるよ」

明日の朝、友希那は自分の指先を見てどう思うだろう。

新しい約束と決意を込めた銀色をその細い指に通しながら、笑ってくれたら嬉しいなあって、アタシはその銀色を通した薬指に口づけた。

Fin







# quest comment

こんにちは、七色さんちのハムスターこと  
キッドです、ごきげんよう(え)  
今回も無事に(?)七色さんのご本に滑り込み  
寄稿させていただきましたー♪  
いやほんとにハムスター住みついてますね……  
背中に張り付くハムスター感……w  
ちょうど時期的に友希那さんの誕生日  
(書き始めた日がまさにだった)こともあり、  
それと拝見していた表紙の雰囲気やタイトルから想像して  
うちのリサゆきさんをお届けしました☆  
楽しんでいただけたら嬉しいです～。  
ありがとうございました☆

The Earth ～この大地を踏みしめて～/キッドさん

<http://kidnooheya.web.fc2.com/>

<http://pixiv.me/kid0923>

[kid\\_and\\_kanako\\_kidnooheya@yahoo.co.jp](mailto:kid_and_kanako_kidnooheya@yahoo.co.jp)

twitter : @kid\_yuuki\_sato

キッドさん今回もゲストSSありがとうございました！  
お風呂えっちエロ～い！！と思っていたら  
最後に指輪とか泣いちゃうじゃないですか(T\_T)  
あまりにも尊い…エモい…  
いつもツボを突いて下さってありがとうございますw

さて、自分の漫画の後書きも書きますね  
リサ姉の攻め顔と友希那さんのトロ顔描けて満足です…  
今までは友希那さん攻めしか描いてなかったので  
受け顔が新鮮でめっちゃめっちゃイキキして描きました(^-^)  
百合CPはどっちが攻めでも受けでもおいしい派で  
私のその時の気分によって描くものが変わるので  
これからも色々描けたらと思います！  
また見てくださると嬉しいです(^-^)



# 魔法の指 魔性の声

2019/11/04

あめいろ／七色

<http://ameiro7.blog2.fc2.com/>  
[ame\\_iro7-nanashiki@yahoo.co.jp](mailto:ame_iro7-nanashiki@yahoo.co.jp)  
twitter→@nanashiki\_ame

Printed by ラック出版様





*BanG Dream!*  
*Girls Band Party*  
*Fan Book*

*LOSA × YUKINA*

*AMEIRO presents*